【ねがいましては】

令和５年１月３日　　*KYOWA SCHOOL*

第３８３号

「競争という非情」

前回３８２号にありましたように、灰谷健次郎さんの著書にある「競争という非情」（灰谷健次郎の発言〈4〉より）という表現が私の中に共感を覚えさせています。教育の中に競争がなぜ息づいてしまったのか、私自身、教育についての専門知識は稚拙なものであり、その内容を断言することなどできません。しかし、子どもたちと触れ合って４５年、その中から得てきたものについては発言してもよいのではと思っています。結論→子どもは競争に疲れている。

私たちが暮らす世界は民主主義、そして資本主義です。資本主義の定義は自由に経済活動ができること。つまりお金儲けは自由活動のひとつ。

私たちは生活のために「お金」を手に入れるため憲法に定める「働く」という行為をすることになります。すでにそこには競争が存在しており、「大金持ち」や「貧乏」といった差別用語が存在します。「高所得者」「低所得者」です。「中間所得者」には、判断がばらつきます。これが個人の主観の在り方で左右されるからです。ここに「比べる」が発生します。何を見て高いか低いか・・・です。この日常がそのまま「教育」のなかに溶け込んだ状態が「今の教育」だと私は感じています。

「しあわせ」とは何か、これも個人の主観の在り方でかなり差が生じます。相田みつをさんの詩にもありますように、『しあわせはいつも自分のこころがきめる』です。そのときの心の在り方で、どのようにも感じ取ることができるという『ひと』になりきれることばだと私は感じています。

いつも気になるのは『となり』・・・身近なものです。高層マンションに暮らせば、高層階は高所得者、低層階は低所得者、しかし、今の都内某マンションでは、低層階であっても１億円は下らないと思いますし、地方へ行けば高額所得者の仲間入りです。そのようなことにこだわっていらっしゃる方もいれば、日本の３大古典文学のひとつ『方丈記』のように、たった一丈（３m）四方の家の中で「しあわせ」を感じることもできます。方丈記は落ち着きます。是非ともお読みいただきたい古典です。実は教え子さんから教わりました。

さて、競争を教育にあてはめます。私は当該者間の心のうちに「くらべる」が存在すれば、もうそれは既に競争を意味すると思っています。くらべる→「高い・低い」「速い・遅い」「大きい・小さい」「多い・少ない」「上手・下手」などなど、多く存在します。それを使ってゲームなど、楽しむことに使用したりもします。しかしここからが「人」、そのままそれを平行移動させ、子どもたちに「成績」というくらべを繋げてしまいました。それが通信簿であり順位です。

常に勝ち負けが存在するものへと教育界は『成長？』を遂げました。

灰谷健次郎さんは１７年間の教員生活の中で得た、その危険性に真正面から体当たりをされた方だと思っています。個性が失われ、自由が失われ、好奇心や探求心が奪われる。「これが本当の授業だ。これが真の学び方だ。」と、多くの書物に表現されました。しかし、その努力もむなしく、現在に至っても学校現場の中の競争はなんら変化していません。

それは現代社会の中に根付いた『成績至上主義』の存在が原因だと思います。成績優秀→高学歴→高所得という方程式が誰にも教わることなく、ほとんどすべての方の中に常駐しているのかもしれません。皆が同じ価値観です。

自分が勝つ→他人は負ける。この時、負けた方に敬意を持つことができるのか。運動会の際、リレー競技で相手チームの子が転ぶと、自分のチームの子たちは「ヤッター」と、喜んでいるはずです。声に出さなくても心の中では「勝ったー」と叫んでいるかもしれません。人の不幸を喜んでいるのです。転んだ子のヒザの痛みを感じていません。運動会を肯定するのなら、相手チームに敬意を払うという「こころの基本」を教えてからだと思います。

テストが返却され、隣の子の点数をわき見し自分より低ければ、すかさず「ヤッター」と、喜んでいる子どもはいるはずです。これをお読みいただいている方、どうでしたか。これも人の不幸を喜んでいます。このような経験を繰り返しているうちに、子どもたちのこころは荒んでいきます。常に心の中で「失敗しろ」「間違えろ」など、自然に浮かぶようになってしまうかもしれません。つまり「非情」です。

学びに、学校に「競争」は必要ありません。スポーツなど、競技を土台とする授業には必ず「相手への敬意」をしっかり教えることが重要だと思います。その他のものには、すべて「助け合う」という学びが土台であることを１年生の段階から伝える必要があると思います。いや、幼・保の段階から必要かもしれません。小学校受験なども増えてきているからです。受験である以上、合・否がかかわっているからです。

しあわせはいつも自分のこころが決めます。比べることはありません。比べることなしに日常を過ごす子どもたち、「ありがとう」「どうしたの」、いつも「ひと」に気をくばりながら歩む子どもたち。

灰谷さんの言に「農業と教育に競争原理を用いたことが最大の過ちだ」と、あります。確かに農業に競争原理を用いた結果、農薬使用量世界第一位→韓国、第二位→日本（OECD2008 年、現在は中国）だそうです。なぜか自閉症児の数が、世界第一位→韓国、第二位→日本だそうです。（同 OECD）偶然の一致なのでしょうか。人は『欲』のかたまり。その中の『成績欲のかたまり』は？　→　こたえ○○○・・・。